

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：32607

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00234

研究課題名（和文）20世紀日本におけるフランス音楽文化モデルの存在と役割 箕作秋吉評価を出発点に

研究課題名（英文）The French Musical Cultural Model in Twentieth-century Japan: A Reappraisal of Mitsukuri Shukichi as a Starting Point

研究代表者

安川 智子 (Yasukawa, Tomoko)

北里大学・一般教育部・准教授

研究者番号：70535517

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：4年間の研究期間においては、多岐にわたる充実した研究活動を行うことができたが、それらは2024年3月に『音楽学』に掲載された共著論文「箕作秋吉の五度和声理論にみる異文化共存—音楽の国際連盟を目指して」へと結実した。箕作秋吉の五度和声理論は、近年海外で注目が高かったが、その本当の意義は明らかになっていなかった。本論文では、理論そのものの斬新さや意義を証明するのではなく、作曲家の文化政治的な活動に注目し、戦前から戦後にかけての「理論の変遷」に焦点を当てることで、箕作の和声理論が、敵対する立場や国の人々の調和を目指す「異文化共存」を目的とする理論構築であったことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本国内だけでなく海外に向けても発表された箕作秋吉の音楽理論と音楽作品は、第二次世界大戦に向かう時期の日本を象徴する事例であったこともあり、国内外の研究者の立場によって様々な読み解きがなされていた。しかし「音楽」または「音楽理論」という対象の抽象性から、そうした読み解きの多くは、研究者自身の国や立場を反映した主観的な価値判断を伴う結論であった。本研究成果の学術的意義は、英語圏に軸足をもつ香港在住の研究者と、主にフランス語圏を研究対象とする日本人研究者の共同研究により、国際的かつ多角的な視野で発表を行い、結論を導いたことであり、研究方法の再考や思考の転換を促すという意味でも社会的意義をもつ。

研究成果の概要（英文）：During the four-year research period, I was able to carry out a wide range of substantial research activities, which culminated in the co-authored article 'Cultural Pluralism in Mitsukuri Shukichi's Theory of Godowasei (Quintal Harmony): Toward a Musical League of Nations,' published in "Musicology" in March 2024.

Mitsukuri's theory of Quintal Harmony has attracted much attention abroad in recent years, but its true significance had not yet been clarified. By focusing on the composer's cultural-political activities and the 'theoretical transition' from the pre-war to the post-war period, rather than proving the novelty and significance of the theory itself, the study revealed that Mitsukuri's theory of harmony was a theory construction aimed at 'cross-cultural coexistence', which aimed at harmonising people from opposing positions and countries.

研究分野：音楽学、フランス音楽文化史、音楽理論史

キーワード：箕作秋吉 和声理論 ロマン・ロラン ヴァンサン・ダンディ フーゴー・リーマン

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、筆者はセザール・フランク、カミーユ・サン＝サーンス、ヴァンサン・ダンディといったフランスの作曲家たちが 19 世紀から 20 世紀に組織的に進めた「古楽復興運動」とそのネットワークの解明に努め、彼らの社会的活動と音楽理論形成（旋法的音楽語法）の関係を追究していた。その結果、東洋の音楽に関心を抱き、和声理論に西洋以外の要素を「音階研究」として早くから取り入れていた 19 世紀フランスの音楽理論的系譜（そこには 19 世紀において独立したベルギーの音楽理論的伝統と、それを取り入れたフランスという構図も含まれる）が浮かび上がり、当然の帰結として、20 世紀初頭に西洋音楽を急速に受容しつつも「日本」という国のアイデンティティを打ち出そうとしていた日本の音楽家・理論家へと連続的に接続されることが明らかとなっていた。

しかしながら、20 世紀初頭の日本における西洋音楽受容研究は、極めて研究層が厚いにも関わらず、その多くはドイツ語圏の音楽研究者とドイツ語圏の音楽を研究対象とする日本人研究者、そして日本音楽の研究者の交流を軸に進められていた。そこで本研究は、こうした日本における西洋音楽受容研究の偏りを少しでも改善するため、キーパーソンとして浮上した作曲家の箕作秋吉（1895～1971）に焦点を当て、以下の問いを掲げることから始まった。

1) 20 世紀初頭の日本において、フランスの組織的音楽活動（音楽理論・批評・教育や音楽協会）はどのように受容され、その後の日本の音楽界における思想・流派形成にいかなる影響を及ぼしたのか。2) 日本におけるフランスの理論的系譜が正当に評価・研究されてこなかった社会的・歴史的理由は何か。

2. 研究の目的

19 世紀後半～20 世紀初頭にかけてフランスにおいて構築された音楽の理論・批評・教育のネットワーク的システムが、20 世紀初頭の日本にいかなる影響を与えていたかを具体的に跡付ける。1930～50 年代の日本では、和声理論や音楽教育の分野でドイツとフランスのモデルを中心とした「折衷型」が定着した。フランスの事例は日本の音楽文化組織形成にきわめて重要な貢献をしたにもかかわらず、適切に評価されていない。そこで、折衷的な「日本和声」理論を主張し、国際的に発信していた箕作秋吉の再評価を出発点に、フランス音楽文化モデルを正当に評価することによって、日本の音楽文化の独自性がどこに在るのかを明らかにする。

3. 研究の方法

本研究は、フランスと日本の 20 世紀初頭～第二次世界大戦後までの一般紙や音楽雑誌を中心とした言説分析、理論書や事典における傾向分析と比較、音楽理論や音楽作品の分析によって、1) フランス音楽文化モデルの概要を把握し、2) フランスで学んだ日本人作曲家や文学者を中心に、フランス音楽・文化の理論的系譜を受け継いだ日本の人脈・思想生成を再構築し、3) 両者（1 と 2）を比較しつつ分析したうえで、その類似性と相違点について、適切な評価を行う。

4. 研究成果

本研究課題における「フランス音楽文化モデル」とは、純粋な音楽理論だけではなく、音楽批評や音楽教育、また音楽協会や演奏会などの組織も含めた、音楽文化全体にわたる社会的システムのことである。今日の日本において「音楽業界」と呼ばれるものにも通じる。本研究ではまず目的の 1) と 2) に関連して、フランス側ではロマン・ロラン（音楽学者・音楽批評家・文学者）とヴァンサン・ダンディ（作曲家）に焦点を当て、彼らの活動を具体的に調査し、彼らと直接的に繋がりのある日本人へと対象を広げて、フランスの音楽文化モデルの在り方とその日本への流入を跡づけた。またその上で、作曲家箕作秋吉と彼の音楽理論・音楽活動に焦点を絞った研究により、20 世紀初頭から第二次世界大戦後までの日本の音楽的世論の変化を概観し、箕作秋吉に関係する具体的な研究成果を得ることができた。さらに 20 世紀フランスの音楽作品の分析を通して、グローバル化していく音楽理論や文化が、新たな音楽創造へと還元されていく様態の研究へと発展しつつある。以下では研究期間内に書籍・論文として発表された主な研究成果について具体的に述べる。

1) ロマン・ロランをめぐる日仏関係について

研究1年目(2020年度)にオンラインで開催された日本音楽学会全国大会では、共同発表及びシンポジウムとして、合計3つの発表を行った。すべて20世紀初頭、特に1890年代から1920年代の30年間に焦点を当てたもので、フランスと日本、フランスとドイツを比較しつつ3つの別々の方向から調査した。まず一つ目は、西田紘子氏と共同で、フーゴー・リーマンの『音楽事典』の独語版と仏語の2版(1899年、1913年)の改訂・翻訳過程を、音楽理論用語に注目して比較し、フランスの音楽理論の独自性や、今日までの用語・概念の伝播過程、音楽(学)関係者の20世紀初頭における国際交流の一旦が明らかになった。ここで、ドイツとフランスの間の架け橋として、フーゴー・リーマンとヴァンサン・ダンディの関係性が重要であることが分かった。

2本目は「100年前のベートーヴェン」と題したシンポジウムで、音楽学者としてベートーヴェン研究に生涯取り組んだロマン・ロランのベートーヴェン観と、それを醸成した当時のフランスの社会的・思想的背景を辿り、世界に先駆けて完全な『ロマン・ロラン全集』を翻訳出版した日本への影響までを考察した。それにより、ロマン・ロランを軸とするフランスから日本への思想の流れと、時間的なずれを跡付けることができた。この研究成果は研究4年目(2024年1月)に、シンポジウムメンバーとの共編著『ベートーヴェンと大衆文化—受容のプリズム』(春秋社)として出版された。さらに、「カミーユ・サン＝サーンスとクラルテ概念」と題したシンポジウムで、長年の研究対象であるフランスの古楽復興活動を、1895年～1915年のサン＝サーンス周辺の言説に焦点を当てて調査することで、彼の古楽講演(1915)の意義や英米圏への広がり、演奏家と音楽学者間の議論と対立が浮き彫りになった。ここでもロマン・ロランの言説を手がかりに背景を整理し、先の発表と緩やかに接続された。

以上の2020年の日本音楽学会全国大会における3つの発表はいずれも20世紀初頭のフランスにおいて、ドイツの影響から急速に音楽学的コミュニティが整備されたことと関わっている。そのコミュニティで重要な役割を果たした音楽学者のロマン・ロランと、作曲家のヴァンサン・ダンディは、フランス国内においては例えばベートーヴェン像の構築という点においても政治的立場においても次第に対立していくが、1920年代からフランスに渡った日本人作曲家(小松耕輔や池内友次郎)やフランス文学者・彫刻家(片山敏彦、高田博厚など)が、ダンディとロランの相反する立場を同時に日本に移入したことが、日本における独特のフランス音楽文化受容につながったことを、上記の書籍内論文「ロマン・ロランのベートーヴェン神話—フランスから日本へ」において、一つの研究成果としてまとめることができた。

2) 箕作秋吉の和声理論研究

研究2年目にあたる2021年度は、前年度に着手した調査や研究をさらに深め、一定の成果を得ることができた。具体的には、20世紀初頭のフランスにおける音楽文化モデルが、確実に日本へと伝播しているという糸口を、複数の研究テーマを並行して進めることで見出すことができた。前年度に行った口頭発表を論文としてまとめる過程で、1. ロマン・ロランやヴァンサン・ダンディ、フーゴー・リーマンら、独仏の音楽学者を中心とした国際的音楽学コミュニティが20世紀初頭に形成されたこと 2. 1920年代にフランスが中国や日本など、対東洋の文化的政策を重視していたこと(その一例が在日フランス大使であったポール・クローデルによる諸活動であること) 3. 箕作秋吉の戦前から戦後にかけての活動は、ヨーロッパ側からの東洋への接近をうまく利用した日本の音楽文化の国際化に大きく寄与したものであったこと、こうした一連の流れが明らかになった。

同時に、箕作秋吉の和声理論に関わる発表を、2021年9月にモスクワで行われた国際学会(共同発表、オンライン参加)で、また博士論文以来の自身の研究テーマであるブルゴー＝デュクドレー(ロマン・ロランやヴァンサン・ダンディと同じコミュニティに属している)とギリシャの旋法性に関わる研究を、同年12月にパリで行われた国際シンポジウム(単独発表、フランス語、オンラインで参加)で発表したことにより、音階論や和声論といった「音楽理論」の問題を先述の「フランスから日本へ」という流れに接続させることができた。

3年目に当たる2022年度は、こうした音階や和声理論に関わる考察を箕作秋吉に焦点を当てる形でまとめていく年となった。2023年3月19日に東京藝術大学で開催した学術シンポジウム「20世紀日本と西洋音楽理論」の第2部にあたる国際シンポジウム「相互文化主義(間文化性)と「洋楽」研究の現在」をコーディネートし、同様の関心を持つ海外の教授や若手研究者を招聘し、有益な研究交流を行うことができた。自身の研究成果としては、箕作秋吉の事例を含めて、19世紀後半から20世紀前半の日本と西洋における「ペントニック(五音音階)和声」の理論化や実践的応用の試みを比較し、発表した。結果として、1930年代以降の日本における(箕作らの)「日本和声」の試みが、ドビュッシーらフランスにおけるペントニック和声の一部を担

う「東洋風」のイメージを自ら引き継いだ部分があることを確認し、また日本における和声理論における試行錯誤と1950年代以降の小泉文夫の日本音階理論とのつながりを検討した。この成果の一部はシンポジウムにも登壇していただいた香港中文大学のCheong Wai Ling教授との共著という形で論文にし、査読を経て2024年3月発行の『音楽学』に掲載された（「**箕作秋吉の五度和声理論にみる異文化共存—音楽の国際連盟を目指して**」『音楽学』第69巻2号）。

箕作秋吉の五度和声理論(1934年にドイツ語、フランス語、日本語で発表)は今日までに定着するような特別新しい発見であったというわけではないものの、日本国内では「日本和声」として、そして海外ではフーゴ・リーマンの和声二元論を応用した日本の和声理論として注目が高かった。現代の視点から、理論そのものの斬新さや意義を客観的に証明することは困難であったが、彼の文化政治的な活動、それも戦前の日本を代表する作曲家として戦後まで国際的に活動した点に注目し、言葉よりも戦前から戦後にかけての「理論の変遷」に焦点を当てることで、箕作の和声理論が、敵対する立場や国の人々の調和を目指す「異文化共存」を目的とする理論構築であったことが見えてきた。本論文は、派生する研究テーマと密接に関連づけられながらも、本研究課題の中心となる総括的研究成果に位置付けることができる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 安川智子・張恵玲	4. 巻 69
2. 論文標題 箕作秋吉の五度和声理論にみる異文化共存－音楽の国際連盟を目指して	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 音楽学	6. 最初と最後の頁 81-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 安川智子	4. 巻 5
2. 論文標題 （研究ノート）カミーユ・サン＝サーンスにとっての「古楽」と「古典」 ピリオド奏法研究の先駆者として(その1)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本チェンバロ協会年報	6. 最初と最後の頁 80-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安川智子	4. 巻 6
2. 論文標題 （研究ノート）カミーユ・サン＝サーンスにとっての「古楽」と「古典」 ピリオド奏法研究の先駆者として(その2)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本チェンバロ協会年報	6. 最初と最後の頁 90-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安川智子	4. 巻 10
2. 論文標題 フランスにおけるワーグナー受容と古代ギリシア悲劇再創造への道 新たなる音楽劇を求めて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ワーグナーシュンポシオン	6. 最初と最後の頁 41-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 西田紘子・安川智子	4. 巻 26
2. 論文標題 音楽理論上の術語の伝播過程における翻訳とその影響関係 フーゴ・リーマン『音楽事典』の独・英・仏語版を例に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北里大学一般教育紀要	6. 最初と最後の頁 21-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.20700/kitasatoclas.26.0_21	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計11件(うち招待講演 0件/うち国際学会 6件)

1. 発表者名 Wai-Ling Cheong, Tomoko Yasukawa
2. 発表標題 Sang Tong and Mitsukuri Shukichi: Hidden Agenda in the Name of Harmony
3. 学会等名 International Musicological Society Regional Association for East Asia (IMSEA), The 7th Biennial Conference (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Wai Ling CHEONG, Tomoko YASUKAWA
2. 発表標題 Imperialism vs Musical Modernism in Japan (1930s-1950s)
3. 学会等名 Royal Musical Association 58th Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 安川智子
2. 発表標題 ポール・デュカスの《アリアーヌと青ひげ》-レヴィ=ストロースの「プリコラージュ」概念を用いた神話論理的解釈
3. 学会等名 文学と音楽のポリフォニー 近現代のフランスオペラをめぐって
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 安川智子
2. 発表標題 ペンタトニック和声の可能性—理論と実践の試みと「東洋風」からの脱却
3. 学会等名 20世紀日本と西洋音楽理論（第2部：相互文化主義と「洋楽」研究の現在—東西二元論とその超克）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Tomoko Yasukawa
2. 発表標題 Vers la theorie de l'harmonie basee sur les gammes : Francois-Auguste Gevaert avant et apres Bourgault-Ducoudray
3. 学会等名 L'histoire au service de la creation : reflexions critiques sur le legs de Louis-Albert Bourgault-Ducoudray（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 西田紘子・安川智子
2. 発表標題 音楽理論上の術語の伝播過程における翻訳とその影響関係 フーゴ・リーマン『音楽事典』の独・英・仏語版を例に
3. 学会等名 日本音楽学会第71回全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 安川智子
2. 発表標題 ベートーヴェンとフランスの1920年代 ロマン・ロランへの共鳴？
3. 学会等名 日本音楽学会第71回全国大会（シンポジウム「100年前のベートーヴェン」）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 安川智子
2. 発表標題 古楽復興活動とclarte カミーユ・サン＝サーンスにとっての「古楽」と「古典」
3. 学会等名 日本音楽学会第71回全国大会（シンポジウム「カミーユ・サン＝サーンスとクラルテ概念 多面的音楽家像を越えて」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 安川智子
2. 発表標題 言葉、空間、音楽のリズムとジャンルの創造 クローデル/オネゲルの《火刑台上のジャンヌ・ダルク》考
3. 学会等名 クローデル・セミナー2021
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Wai Ling, Cheong; Tomoko Yasukawa
2. 発表標題 In Dialogue with tradition and Riemann: Mitsukuri 's theory of Japanese harmony
3. 学会等名 International Conference, Vlado S. Milosevic: Tradition as Inspiration (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Wai Ling, Cheong; Tomoko Yasukawa
2. 発表標題 Riemann and Hindemith made Indigenous: The "Nationalization" of Harmony in Japan and China
3. 学会等名 10th European Music Analysis Conference (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 大出敦編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 378
3. 書名 クローデルとその時代	

1. 著者名 沼口隆・安川智子・齋藤桂・白井史人編	4. 発行年 2024年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 328
3. 書名 ベートーヴェンと大衆文化－受容のプリズム	

1. 著者名 荒木善太・和田恵里・福田美雪編、澤田肇・稲田隆之・安川智子・林信蔵著	4. 発行年 2024年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 288
3. 書名 オペラの時代－音楽と文学のポリフォニー	

1. 著者名 キリスト教文化事典編集委員会（編）・安川智子（分担執筆）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 790
3. 書名 「音楽と自然」「革命以降のフランス音楽における宗教性」『キリスト教文化事典』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 相互文化主義と「洋楽」研究の現在－東西二元論とその超克	開催年 2023年～2023年
---------------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
中国	香港中文大学		